寒中お見舞 るもいのまち

風物詩

おとそやおせち料理を囲み、久しぶりに集まった家族でわいわいがやがやと暮らした楽しいお正月が過ぎ、日常の生活に戻ったことと思います。

南国沖縄では桜の開花宣言がされ、桜前線のトップを切り春の訪れがスタートしました。

雪に覆われた留萌の春はまだ遠く、冬将軍との戦いが続きますが、雪との暮らしは南国では味わえない、違った恵みを与えてくれます。

今年はなにかと不況風が吹く年となりましたが、威勢良く始まった魚市場の初せり、消防出初め式、書初めなど、留萌のあちらこちらを写真でご紹介します。

力強い筆運び。小中学生書き初め大会

威勢よく始められた魚市場の初セリ

寿児童センター、ふれあいセンターテープカット

413人が晴れの新成人

港でチカ釣りを楽しむ太公望たち

北光中学校グランドのスケートリンクで楽しむ子供たち

家内安全など祈願に神社参拝

晴天の中で行なわれた消防出初め式

乙女の～♪　ハイッ！
23チームが参加した少年かるた大会

留萌いま・むかし　第86話

るもいの熊

福士広志
海のふるさと館学芸係長

北海道で一番大きな動物と言えば「ヒグマ」である。近頃はめっきり数を減らしたと見えて、留萌では遭遇したという話は聞かない。しかし、昨年の新聞報道によると、冷夏で、山に食料が乏しかったせいか各地に出没していた。留萌にも昔は多くのヒグマが生息していたらしい。

安政三年に石狩から信砂を越えて留萌に入った松浦武四郎は「西蝦夷日誌」の中に、一晩に三回も熊に遭遇したと書いている。また、信砂川の河口に出たときに武四郎の一行は捕らえた熊、キツネ、カワウソ、ウサギを背負っており、海岸にいた人たちを驚かせた。

また、昭和二十年に出た「留萌町史」に古老の話がのっている。

捕獲されたヒグマ

―これは古い話で明治十七、八年頃かと思いますが、今の副港の真中ころに湖水のようなものがありましたが、ここはもちろん、今の警察署の所から東の方は藪のようになっていたので人里離れた場所でもありました。

にあったのですが、水が悪く、郵便局の下の涌き水を樋で引いて使ったのですが、ここにもよく熊が出たそうです。―

副港の真中というと今の開運町二丁目あたりで、郵便局の下とは本町一丁目の秋近くに働きにきている人たちは良く昼飯をその湖水に舟を浮かべて食べたそうです。なぜかというと、熊が頻繁にあらわれるので恐くて、舟でないと安心して昼飯を食べれなかったからだそうです。また、明治二十三、四年頃、栖原は川北フルノハイヤーの下である。こんな所まで熊が横行していたのである。

また、明治二十六年頃まで三泊でアイヌの人たちが「イオマンテ（熊祭）」をしていたと言われている。

それから、現在の十二線の沢を昔はイライエウシナイと呼んでいた。この地名は「イ（それを）ライエ（殺す）ウシ（いつもする）ナイ（沢）」という意味のアイヌ語である。アイヌの人たちは熊を神様と信じていた。そのため、「それを殺す」とは「熊を殺す」という意味で、神様にはばかって「イ（それを）」と代名詞で熊を呼んだのである。この沢は昔から熊の通り道だったと言われている。

熊がもう神様ではなくなってしまったのは残念なことである。